

教育・研究の場 としての学会

IEICE, from the Viewpoints of Education and Research Activities



会長 酒井善則

NTT 研究所から東京工業大学の助教授に就任した折、書類に助教授の業務として研究・教育と書いたところ、教育・研究に書き換えるよう指示されたことがあります。東工大在職中に私の研究室を卒業した博士卒業生は修士卒業生の数分の一ですから、大学教員の最大の仕事は教育であるということは当然かもしれません。ただ、ノーベル賞等重要な賞を受賞した教員が高く評価されるように、大学教員の評価は主に研究業績が基準となるため、皆さん教育、研究の順番をどう意識しているかは分かりません。また、優れた研究業績を上げている教員の研究室の卒業生には、社会で活躍している方が多いようにも思われ、研究することが教育にもつながるという面も大きいと思います。

一方、学会は主に研究・開発を目的として設立されています。学会の役割は場を提供することです。研究といっても、学会は研究機材を提供することはしません。研究・開発についての討論を行う場を提供すること、論文という形で研究開発の評価を行うこと、が学会の主な役割です。ただ会員全てが研究、開発に従事しているわけではありません。会員全てが毎年1編論文を執筆したら、毎月の論文数は2,000編以上になるでしょうから、現在の論文誌の規模は一桁大きくなります。学会はやはり、研究とともに、学習・交流の場でもあるわけです。学会には多様な会員がいることを利用して、多くの分野を学習できる場を提供することも重要でしょう。教育、研究という機能の順番は大学同様、学会でも問題になります。

会員数の減少は深刻な問題です。会員にとって学会という場の必要性が小さくなったとき、会員は学会を辞めるでしょうし、また新規加入も減少します。学会の発展を考える際には次の事柄が重要と考えています。第1に学会の研究面での評価が高いこと、すなわちそこに論文を発表すること自体が高く評価されることです。高い評価を受けている学会という場は多くの会員にとって魅力的です。今回のノーベル賞受賞者の方が本会論文誌に論文を執筆していたことは大変うれしいことですし、今後も本会に良い論文が掲載されることが重要です。一方、評価の一側面である論文誌のインパクトファクターは、掲載論文が多くの論文から引用されることで高まります。執筆される論文の完成度を高めるお手伝いとして、学会ではI-Discoverの充実等で関連する論文を皆様が参照しやすく、同時に皆様の論文が参照されやすくしています。学会論文の引用が高まれば、結果として学会論文誌の価値も高まることになります。第2に重要なことは、直接、研究開発に従事していない会員にとっての学会という場の価値を高めることです。学習の機会の増加、就職先の紹介、国の政策立案への参加、新しい資格の取得、全てが多くの会員にとっての学会の場の価値となります。より多くの会員にとって、参加することに意義のある学会にする必要があります。そして第3に、新しい分野の創成、このための仲間の募集が容易なことが学会の価値となります。電子情報通信分野は成熟分野とも言われます。ただ、多くの新しい分野は成熟分野からも生まれます。学会が成熟分野にとらわれなければ、自然と新しい分野は生まれます。

少子高齢化社会において学会を発展させることは容易ではありません。学会論文の価値増加一つ見ても、大きな課題です。会長としての私の仕事は、学会の非効率的な部分はできる限り排除すること、多様な場として利用しやすい組織とすること、そして全会員の方に、論文誌も含め学会の価値を一緒に高めましょう、活動しやすい学会を一緒に作りましょうと願っています。